

国木田独歩と植村正久

— 佐伯時代以前を中心 —

鈴木 秀子

一、佐伯以前における独歩の信仰をめぐって

《殆ど手におへない程の臍白、大酔するまでの飲酒・世界第一の政治家たらんとする野望、これらの中には後の独歩に表にあらはれては見られないものが一貫して流れてゐることが知られる。(中略) このやうな外に向つて荒れ狂はうとする彼を、内に向つて沈潜させていつたのである。それこそ、彼が上京して専門学校に入った時、彼を革新させる基督教なのである。この影響は大きな感化力をもって、その後約十年間の彼の生活を蔽ひつくしてしまつてゐるのである。》

独歩とキリスト教の關係を見る坂本浩氏は、著書「国木田独歩」の中で、独歩の友人、田村三治が独歩は早稲田政治科在学中、ワトズワイスやカーライルによって人生問題に対する興味を呼び起され、その解決を求めめるために教

会の門をくぐったと思ひ出の中で、独歩が教会へ行く方がワーズワースやカーライルよりも前であることから、田村の思ひ出の前半を疑問視している。しかし、後半、すなわち独歩が教会へ行くようになったのは、人生問題を真剣に考えていたからであるという点には同意している。そして、熱心なクリスチャンの友人、佐藤毅の影響が早くから独歩の上にもみられるとし、独歩がまだ教会を知らない二十二年十一月に「女学雑誌」にのせた「アンピション」に、彼の感化がみられることをも指摘し、こうした下地があったからこそ、初めて連れてゆかれた教会で、植村正久の説教に同感を覚えたのだと述べる。

坂本氏がまず田村三治の思ひまちがいを訂正したように、独歩が教会へ行くのはワーズワースにふれる前であったことは明らかである。佐藤毅の独歩に及ぼした感化も認められる。それは、漠然とした、考え方における影響だけではない。独歩は、二十二年一月の「女学雑誌」にのせた「アンピション」という時評的短文を《正人・義士・真に動き、真に泣き、熱涙滴る時起ち、聖霊躍る時鞭を採る者、望むらくは吾が同胞姉妹青年諸士の中に現はれん事を。》と結んでいる。《聖霊》という言葉を神学的に正しく使いこなしている。また、「感ずる處を記して明治二十二年を送る」の中で、《一番町耶穌教会堂にて嚴本善治君の廢娼演説あり》と記している。

独歩が求道者として一番町教会の門をくぐったのは、佐藤毅にさそわれたからであったが、実際には独歩はもっと早く教会に出入りしていたのではないかと思われる。だが、独歩が教会に足を運んだ動機は果して人生問題の解答にあったらうか。この点に関しては従来の説通り、ほとんど事実を書いた小説「あの時分」を素直に受けとる方が正しいと考えられる。

《他の下宿に移つて間もなくの事でありました、木村が今夜、説教を聴きに行かないかと言います。それも断つて勧めるのではなく、彼の癖として少し顔を赤らめて、もぢ／＼して、丁寧に「一言行きませんか」と言つたのです。

私は否と言ふことが出来ないどころでなく、嬉しいやうな気がして、直ぐ同意しました。》

佐藤毅に、最初さそわれていった教会は麴町一番町教会であり、牧師は植村正久であったことは、田村江東「信仰の人」独歩「趣味」明治四十一年八月）のなかであきらかにされている。

笹淵友一氏は「『文学界』とその時代」の中に入信の動機として、明治二十二年、独歩が女学雑誌に寄せた「アンピション」「感ずる処を記して明治二十二年を送る」「水車と姦淫公許」など、キリスト教会を中心に推進された社会改良運動の影響を挙げている。その頃の独歩は社会倫理に関心を示し、風俗的改良運動について強い問題意識を持っていたからである。「女学雑誌」がこの運動の推進力の一つであったからこそ、独歩はこの雑誌に、自分の云いたいことを投書したのである。そこには社会倫理的な面からのキリスト教に対する思想的共鳴があり、彼が洗礼を受けたのも、そうした背景にもとづくもので、人生とか哲学とか文学に促されたものではなかったという論である。この点は植村正久が社会的意識を充分にもち、組織的教会をめざしていたことから、納得できる。それは確かに、独歩が受洗する一つの遠因にはなっている。しかし、彼には受洗し教会に属することによって、社会的風俗改良に少しでも参加しようとの意識はみじんもなかった。結局、独歩が教会へ行ったこと自体には別に深い意味はなかったのである。

当時、独歩が住んでいた牛込早稲田町は比較的、一番町教会に近かった。一緒に洗礼を受け、のちのちまで信仰上の深いまじわりをもった田村三治宛の、明治二十三年五月十八日付のはがきには、《今日、教会に行く都合なりしが止みぬ別に理由なし、只だいやになりたればなり》と見える。「植村正久とその時代」などには今もって、独歩の受洗の日を、明治二十二年としてあるが、明治二十四年一月四日に、《日曜日、午前教会へ行く。受洗す。》と記している独歩の日記の方が正確であろう。たゞ、一番町教会のあとを受けついたので、富士見町教会であるが、当時の受洗名簿は、大震災の時に焼失されて、残されていない。ともかく、独歩が教会にゆき始めてから、少くとも一年にわたる

求道者としての準備期間があったと考えられる。当時のプロテスタントの教会の雰囲気は、「あの時分」によく描かれている。その中で、「ベツレヘム」という言葉に強い印象を受けたことや、会堂にみみぎる花やかな煌々とした浄燈の光、長い房々とした髪に白い花をつけている清らかで美しい少女たち、高い天井、白い壁、壇上の薔薇の花と、たゞよう香氣、「たへなるめぐみ」、「まことのちから」、「愛の泉」などのオルガン伴奏による讚美歌など、心をうばわれたものを列記したあと、独歩は、始めてのぞいた教会の印象をこう結んでいる。《それから牧師の祈と、熱心な説教、そして繪が終つて、堂内の衆人一斉の黙禱、此時の暫時の間のシンとした光景——私はまるで別の世界を見せられた気がしたのであります。》

植村正久が二番町教会を受けたのは明治十八年である。彼はその頃、下谷教会の主任であつたが、もつと知識階級への伝道を希望して、麴町のイーストレーキ宅（米国人の歯科医）をかりて伝道を始め、そこに会堂を建てて、二番町教会と称し、二十二年一致教会が日本基督教会に改組された頃から中堅牧師として重んじられた。独歩が受洗した二十四年頃は、一番町教会の会員数は約二百五十人であり、礼拝に出席する人は三百十名位であつた。

羽仁もと子はその当時を思い出し、「明治女学校と二番町教会」という一文をのこしている。

《明治女学校の人たちはまた、日曜には、その頃の二番町教会に行つた。植村正久先生の教会で、今の富士見町教会の前身である。私も皆と同じやうに、植村先生の説教には、本當に引きつけられて聴いてみたけれど、あまり分つてはゐなかつたやうに今になつて思はれる。（中略）植村先生の所に洗礼をうけたいといつて行くと叱られるとその頃皆いつてゐた。学校を出て嫁に行くと、忘れてしまふやうな信者は駄目だといはれるといふことであつた。私は心に多くの疑問を持ちながら、さうしてどうかして植村先生に教へて頂きたいと思ひながら、あなたはそんなことまで分らないのに、どうして洗礼を受けたのだといはれるのが恥しくもあり恐しくもあつて出来なかつた

やうである。》⁽²⁾

また、田村江東は、次のようにのべる。

《一番町教会は今の富士見町教会の前で、当時非常なる隆盛を極めたものである。其頃此教会に出席した人に、島田三郎氏夫妻、片岡健吉氏、巖本善治氏、木村駿吉氏、斎藤宇一郎氏、門野重九郎氏、久保田与四郎氏等を始め有名なる多数の人々であつて、高等教育を受けて居る男女学生は殊に多く、元氣常に会堂の内に充溢して居た。》

(「趣味」明41・8)

青年の心を強くどらえた教会の雰囲気が青年を信仰へ導く例は、島崎藤村の「春」や「桜の実の熟する時」の中にも見られる。その中には牧師として植村正久のことも描かれている。

《斯の生徒等は会堂にある風琴の近くに席を占めて、思ひ思ひに短い黙禱をささげて居た。やがて聖書翻訳の大、事業に与つて力があると言はれて居るその教会の牧師が説教台のところへ進んで来た。訳した人によつて、訳された聖書が読まれる頃は、会堂の内は聴衆で一ぱいに成つた。勝子等はもう捨吉の居る所から見えなかつた。あの旧の高輪の学窓のチャペルで、夏期学校で、あるひは其他の説教の会で、捨吉には既に親しみのある半分吃つたやうな声がポツリポツリと牧師の口から泄れて来た。》(「桜の実の熟する時」)

当時プロテスタントの洗礼を受けた青年の中にこうした経路をたどつた者は少くない。ここで問題になるのは、信仰が、青年の内面においてどのよう主體的に深まらうかという点である。近代日本文学を形成して来た作家のうち、プロテスタントの洗礼を受けた人は数多いし、プロテスタントを抜きにして、その人々の文学をは理解できないのである。国木田独歩は「欺かざるの記」の中に、当時のプロテスタントの一人としての魂の告白を記した。それは独歩個人の内面生活の記録でもあるが、同時に明治二、三十年代の文学を正しく把握するための貴重な資

料でもある。

二

国木田独歩は受洗して植村正久の影響を強く受けることになる。植村正久は明治二十年以後一番町教会を中心として、多方面にわたってキリスト教運動に参与していた。この頃の一番町教会のことは「植村正久とその時代」巻三にくわしい。また聖書翻訳に協力し、青年の活動、「六合雜誌」の編集、「真理一斑」、「福音道しるべ」などの神学的著述をなし、「福音新報」を発行した。明治二十一年、イギリス、「アメリカに留学して神学をおさめて帰朝し、基督教界でのそのめざましい活動に人々の注目を集めていた。明治二十三年には、「福音週報」（後の「福音新報」）をもって基督教伝道の機関紙として、全国の教会によびかけ、一番町教会の名をひびかせていた。また、同時に「日本評論」（明23刊——同27廃刊）を出し、各方面の名士の寄稿と、植村執筆の時事問題、文化面の諸記事は知識階級に大きな反響をよんだ。その影響はひろく、当時の政界、思想界に及んだ。こういった雰囲気の中へ入って来た国木田独歩が強い刺激を受けたことはいうまでもない。ここで植村正久から、独歩がどのようなキリスト教の教義を学んだかを知るためには、まず植村の説いた教説をしらべてみなければならぬ。

植村正久は、内村鑑三とともに、日本にキリスト教（プロテスタント）を確立することを通して、日本の近代化に大きな役割を果たした人である。しかし、日本へのプロテスタントイデオロギズム移入をめぐって二人の立場はちがっていた。植村のあり方への理解なくして独歩を理解することはできないのである。〈無教会主義〉の基礎を築いた内村鑑三は、西洋のキリスト教会の伝統や神学、信条、教会政治、職制を問題にしないで個人を中心にした。それとまったく対照的に、植村は西洋プロテスタント教会の伝統に従って日本における教会形成につくした第一人者であった。

内村鑑三と植村正久は、それぞれ性格と活動とを異にし、同じキリスト教のために生涯をついやした人であるが、一方は個人主義的な信仰の立場を固守し、他方は教會的組織と伝道的活動に集中したのである。植村の行動と思维の地盤が一個人でなかったこと、伝道に重点をおいたことなどは、独歩を考える場合、忘れてならないことである。植村は一致教會、すなわち日本基督教會を地盤にして、日本の教會を広く社会との関連で考えた。日本の教會を国家と社会の中で把握した彼は、個人ではなく、日本のキリスト教という意識のもとに、他者との連帯感を強調した。同時に、日本の教會の眞理性を阻害するものに対しては激しい挑戦をくりひろげた。彼の思想と行動は、こうした闘いの中から現実の問題と密着しながら發揮され主張されてゆく。したがって、植村正久の神学上の立場と思想は、論争を通して一番明瞭にされてゆくのである。

この事実を大内三郎氏は、「福音と世界」(昭40・10)において、〈植村正久自身みずから挑むべき相手を、挑戦に応ずべき相手を見失ってしまったとき、その時は植村の「行動」と「思想」の進展がみられなくなり、それが停滞しはじめたときでもあった〉とのべ、植村の本質的特徴をいかなく物語る事件として次の諸論争をあげている。

明治十年代に東京大学を中心とする進化論の挑戦に対して試みられた〈眞理一斑〉の弁証論、明治二十年代の〈新神学問題〉とその延長の同三十四、五年の〈植村——海老名基督論論争〉、〈内村鑑三不敬事件〉、〈教育と宗教の衝突事件〉、明治二十二年日本基督教會の信条制度、二十七年の日基大会伝道局の独立、三十七年の東京神学社の設立、翌三十八年の日基教會の自給独立の決議、四十三年に彼の執筆した「朝鮮の基督教」による「福音新報」発売禁止、四十四年幸徳秋水の大逆事件関係者として断罪に処せられた大石誠之助(日基教會員)遺族に対して行なった遺族慰安会、四十五年の政府三教會同に対する反対などである。

こうした事件を羅列してみただけで、すでに植村の立場は臆測できるが、彼の神学的立場を最も明瞭にするものと

して金森通倫との「新神学」をめぐる論争およびその延長の海老名弾正とのキリスト論論争をあげている人々に、石原謙、隅谷三喜男、小沢三郎の諸氏がおり、この論争に關しては、日高善一「植村正久の神学的論争」（『神学与教会』植村記念号）及び青芳勝久著「植村正久伝」にくわしくとりあげられている。

明治二十年代において、日本のキリスト教会をその内部からゆさぶった『新神学問題』とは、ユニチュリアン主義、ユニヴァサルイズム、ドイツ普及福音教会のテュビンゲン学派の神学など、近代合理主義に迎合した神学思想の概称である。それは、こうした『新神学』という自由神学の影響を受けた、組合教会派の金森通倫牧師が、明治二十四年六月に「日本現今之基督教並ニ将来之基督教」という小冊子を出したのに端を發した。金森が、基督の神性と十字架の贖罪を主張する信仰を否定したのに対して、植村は、日本評論、とくに二十四年七月十日号及び二十五日号の「現今の基督教並びに将来の基督教」において、『新神学』の論理を分析し、それをキリストの福音の論理で整然と鮮かに論破している。彼の主張するのは、聖書にもとづき、イエス・キリストは神の啓示であり、神の子として処女マリヤより生まれ、十字架の死と復活とによって人間の罪を贖われたのであり、人間の罪の深さに対する救済は、そうした神の大きいなる業、福音なしにはありえないとの奥義である。この『新神学問題』との闘いを通して、植村の指導する日本の教会は、ようやく自分の拠るべき福音主義の方向を明らかにする。

さらに『新神学問題』の延長である海老名弾正とのキリスト論論争で、海老名の立場を徹底的に論駁し、福音主義こそ日本の教会の拠るべき基本線であることを宣言することになる。ここに見られる植村の主張は、独歩のキリスト観との差を知る上に重要なのである。

「余は、神は人となりて世に下り、十字架に死して人の罪をあがなひたるを信ず。しかして余輩の信するイエス・キリストは生ける神の独り子にして人類の祈りを受け、礼拝を受くべきものなり」⁽³⁾

と宣言する植村は、「キリスト教の本質」（『神音週報』第14号、明23・6・13）の中で次の点を強調する。

第一は、神はキリストにおいて受肉し人となり給うたということ。無限の靈、公正の神の存在は、古来から人心のおのずと帰向するところの〈信認〉である。けれど、人は弱く、その徳性は健全ではないので、無限の神と親しく接することはできず、神に近づくことを怖れる。神と人類との間に無限の断崖がある。キリストこそ、この三者の橋梁を架けるものである。キリストとは、第二のペルソナである言が肉体となつて人のうちに住み給うた。ここに、神人の和合が成つたのである。人類は、キリストにおいて神を見、また、神を愛することができる。キリストの神性を信認することが、キリスト教の第二要領である。

第二の点は、キリストが世に降つて人の罪を償われたこと。人に罪のあることは、自分の身を省みる時に否むことはできない。この罪を断ち切ってくれるのが、キリストである。贖罪の道はキリストの道であり、〈この教えを抜き取らんとするは、キリスト教の全体を抜き取らんとするに異ならず。〉

第三の点は、〈復またび生まるるにあらざれば神の国に入ること能はず。〉人は自己の力をもって悪を去り、全き善に遷ることはできない。十字架の光において、人には再生の約束がされ、キリストは聖靈によって、新たな意志、新たな生命をつくる。だから人類はキリストによって神の国に生まれることができる。そして植村正久は〈これら三つの要道を信ぜざるものは、キリスト教を信ずるものにあらざるなり〉と結論する。

次に植村の〈主体性〉が問題となる。植村は主体性を〈志〉という。彼の主体性は、キリストの十字架の死と復活とによって自分の罪が贖われたという彼の信仰告白にもとづいたものである。すなわち、彼は次のようにのべる。

《耶穌によつて新しい氣力を其の靈魂に吹き入れられ、既に天に存るが如き思ひをなして、世に疎まれる罪人でありながら、聖人の如き平和を懐くことを得たのである。キリストは彼にも他のすべての罪人にも新しき志を与ふ

るのみならず、これを成就すべき力を与へ、居ながらにして天に昇りたらんが如き思ひをなさしめ、新しき生命を手握りたるの確信を生ぜしめ、平和と喜悅、胸に溢れて、手の舞ひ足の踏むところを知らざらしむる』〔救いとその代価〕明41）

植村の主体性とは、〈志〉の実体を變革して、〈新しき志〉を与えるものであるが、それはたんに、主体の内面において實現されるものでなく、〈形而上の高尙なる実物を認識せしめるものである〉⁴⁾。それは、主体を現狀で満足させないで、現狀を克服し、新しい面を切りひらくものであり、自己の有限性を破って形而上のものを追求してゆくところに實現され形成される。文學においては、〈有限の世界より眼を転じて無限の世界を望み、吾人の不完全なる義に由りて、完全なる義者の堂々として上に照臨するを仰ぎ、有形界の美妙に感じて知らず知らず無形なる美の本体に接するを覚ゆるに至りて絶奇絶妙の無限と瞻仰を起こし、雄篇大作を成就することを得〉〔基督教文學と仏教文學〕明26）せしめるものである。そして、植村の主体性は、あくまでキリスト教の創造神、贖罪のキリストの信仰告白にもとづいているのである。

以上、みてきたことは、佐伯時代に美しい自然に接する独歩の中に成長進展する彼の信仰と、さらに佐々城信子との恋愛時代の信仰、そして信子失踪後の信仰の性格を知る上で、はっきりと把握しておかなければならない基礎的諸点である。作家として出発する独歩の中で、かつてもっていた信仰は失われたのか、或は始めから彼自身が云うように、信仰は夢にすぎなかったのか、または、信仰はあったが、信仰箇条の教義の不理解にもとづいて、信仰が他のものにすりかわっていったのか等の諸問題を検討する基盤となるのである。

〈日曜四日、午前教会へ行く、受洗す〉

洗礼を受けたことについて、独歩はこれだけしか書き残さなかった。洗礼は決してその場の思いつきで受けられるものではなく、一生の問題であるから、受洗の前後のことは日記などに刻明に記されているのが普通である。求道者としての洗礼前の期間に植村正久の指導を受けていることは確かであるが、受洗の感想がないと同様、洗礼にまで決心してゆく内面的告白は、残された資料からは見つからない。二十四年四月一日に洗礼を受けた独歩の信仰が佐伯以前はどういうかたちであらわれてくるか、「欺かざるの記」を、時間を追いながらしらべてみたい。

《余の軽卒にも久保田君を悪評したるは如何にも余の恥づる処なり、然れども余は余の罪を弁護せざる可し、弁護すれば弁護する程、余の罪を重くする者なればなり、今、余は実に久保田君の如此き悪徳の非ざる事を信ず、而し余はまことに氏を愛せん事を欲す、氏も亦た余を愛せん事を望む、久保田君は真に神の愛を信ずる者なる可し、余も自信す、余亦た神の愛を信ずる者なりと、然らば余と久保田君は相愛し相敬し相信ぜざるを得ざる者なり、然らざれば、余と久保田と、何れか偽信者ならざる可からず、余は実に此の事のなからむを望む》（明24・3・26田村三治宛書簡）

ここで独歩は一つのトラブルをめぐり、〈神の愛〉を信ずることを表明している。彼の信仰が〈神の愛〉にむかっ
てゆく。〈余も亦自信す、余亦た神の愛を信ずる者なり〉というような表現を通して、彼の信仰は〈神の愛を信ずる〉
というすがたをとって表明されている。

毎日曜の礼拝、祈禱会に独歩は欠かさず出席し、熱意をもって信仰生活を送っていた。この信仰生活に対する熱意が、彼に真の意味での信仰を与え深めてくれたのである。神と個人との強い結びつき、すなわち個人の靈的経験が深まらない限り、キリスト者の信仰は養われず、そうした中心をぬきにして、キリスト教の共同体の意識という社会的

な面だけが強調されると、キリスト教は生命を失い、たんなる社会運動と化してしまふ。独歩が、キリスト教の中心である〈神との一致〉より、キリスト教のもつ社会倫理の側から受洗したという動機づけは、のちまで独歩が眞の信仰を持ちえたのか、あるいは彼の信仰そのものが、どれ程の深さをもっていたのかと疑問視させる。しかし、多くの人がそうであるように独歩の場合も、キリスト教信者になってのち、すなわち教会での信者とのまじわりと指導の中で、個人としての靈的な葛藤を通して、信仰を培っているのである。この段階の独歩の主観においては、信仰は決して、いい加減なものではなかつたのである。

郷里山口ですごした頃の日記には〈植村正久氏及び徳富猪一郎氏に送る可き書状を認む〉(日記「明24・5・12」)
 〈田村氏に托して一番町教会の感話会にて読ましむ可き活氣と云ふ事に付て筆を採る〉(「日記」明24・5・19)と記されている。また、田村三治に宛てた八月二十一日付の書簡で、山口教会(現在、日本キリスト教会山口教会)のこ
 とにふれている。〈山口教会はだめなり日曜学校殊にだめなり、教師其の人を得ずだめだめ〉。これは一種の教会批判
 のような形をとっている。〈山口教会はだめなり〉と云いつゞいて、〈近頃吾教会の様子如何〉とたずねている。山
 口教会への批判は一番町教会との比較にその根拠がある。またこの手紙の中には〈偽善的クリスチャン〉という言葉
 があらわれてくる。さらに二十四年一月五日の田村三治宛の山口からの手紙に〈植村先生御無事にや僕が志ば——書
 状まひらし候へども御多忙の故乎御返事なく僕も少々不平なれど実は偏屈の所先生の先生たる所以とあきらめ居
 候〉(明24・12・5田村三治宛書簡)と書いている。その前、二十四年五月十八日水谷真熊宛に〈一番町教会金森君騒
 動は其後如何相成りしや、秘密部分少し御聞かせ被下度候〉とたずねている。たえず東京の一番町教会のことを心
 にかけているのである。これは当然のことではあるが、やはり独歩にとって、教会生活というものが、一つの大きな意
 義をもっていたのである。

東京に帰って来た独歩は二十五年九月二十二日に、《十八日の日曜日に久し振にて植村正久氏の説教を聞いて少なからざる益を受け申し候》（田村三治宛書簡）と、久しぶりに一番町教会に帰り、植村正久の説教に心がやしなわれる思いがしたことをのべている。学生として教会に通っていた頃、吉田松陰に憧れた彼の心は、外部に向かいがちだった。だが、そうした傾向は東京専門学校におけるストライキとその失敗によって打ち倒されてしまった。その結果、田舎の自然の中で過ごす失意の一年一か月の生活は、独歩の目を内面に向って開かせるのである。同じ教会生活をつづけながらも、内面への目醒めを経験した独歩には、かつて見られなかったほどの信仰に対する真剣な求道的態度が生まれてくる。この頃、独歩の中で《如何に生く可き乎（How to live）の問題が芽ばえているのである。この書簡は《学業を中途で放棄して田舎に埋れようとし、而も田舎の沈滞した空気に堪へえずして再び上京した》⁽⁵⁾独歩が、順調に卒業した田村三治にあてた祝いの手紙である。《クリスト教へ給て曰「神の国を求めよ」。ア、大兄は如何なる境遇に出遇ふとも如何に困厄の襲来するとも決して此の教にそむく可からざるなり》と、《神の国》を強調し、《实际的に如何にすれば神の国を求め得べき乎「我父は今に至るまで働き給ふ我も亦働くなり」大兄只だ今より後に来る可き問題は。然らば吾は如何なる働を為して吾が短かく亦た憐なる一生を神に捧ぐ可き乎の問ひ。此れなる可し。》と云う。こうした表現の中に、やはり《神の国》という、信仰上の問題意識が見られるのである。これは独歩の心をこめた、友へのすゝめであるが、独歩自身の生活の中に、そういう信仰の問題意識があったからこそ、始めて言える言葉だったのである。さらに続けて、《僕は敢て短かく憐れなる一生と云ふ。之れ決して鳥部山の煙。あだし野の露流儀の悲観的にあらず。其れ只だ短かき憐れなる一生なり。人間は決して之れを以て安心立命し得べきに非ず。すべからく之れを貫き命となす可き。則ち天の神を信じて御同を求むるにあり。人生は貴し。如此にして始めて貴し。人間の働き望あり如此くにして、始め望あり。吾れの行先は光明なり。如此にして始めて光明なり。》（明25・9

・22 田村三治宛書簡)とのべている。

これは、きわめて一般論的な表現と云えるかもしれないが、独歩の中に起った精神的革命が、信仰と密接なかゝわりをもっていたことは否定できない。彼にとって、教会へ行き受洗したという行為自体は、それほど深刻なことではなかった。彼が教会に行ったのは、人生問題を考えた結果ではなかった。むしろその後の教会における信者との共同体意識や、植村正久の説教、指導を通して、彼のものの考え方が、政治的な世俗の中での事業ということから、もっと精神的、内面的な方向へ向けられていった。そこに「如何に生くべき乎」という問題が主体的に問われてきて、それが、「神の国を求めよ」という信仰的イデーに凝結していったと考えられる。付焼刃でも浅薄なものでもなく、木田独歩における人間形成の本質をなすものであった。この書簡はこの時期における彼の信仰の姿を考える上で重要なものである。

《神の国の前に義とせらるゝ真大人真英雄は始めより英雄たり大人たるを期したる者に非ず。彼れは寧ろ先づ真の人間とならん事を努めて然る後。神彼に大なる努めを下し賜ふ。真の人間は。神の国の民にして大人真英雄之を守りて世の悪魔と戦ふ兵卒也。神は大将なり。吾々先づ神の国民となり体軀を強壯ならしめざる可からず。志からずんば何んぞ「以下五字抹消、兵卒となり」神の兵卒となり。(大人となり英雄となり)得んや。吾等罪多く、力足らず。志やゝもすれば卑しく望む所、やゝもすれば汚し。神の国民となるなら難からんとす。豈に高慢にも兵士たり戦卒たると得んや。》(明25・9・22 田村三治宛書簡)

《神は兵士として吾を要し給ふの時必ず来らん。吾日本前途成す可き戦ふ可きの事多し。然りと雖も念々忘る勿れ先づ極めて謙遜なる神の国民たらん事を。》(明25・9・22 田村三治宛書簡)

神の国を打ちたてる兵士であるという考えが明瞭に湧き出てくる。さらに、もう一度前の問題にかえて、《大兄

は如何なる働をなして神の国を求む可き乎。如何なる働にても宜し。そは大兄の必ず撰ぶ処ある可し。只だ其の働に向て大胆に進め。大胆に働け。神は必ず守り給はん然らば神の国は己に業に吾れにあるに非ずや。ア、望あり光ある兄弟。只だ神を信じて大胆に進め。》（明25・9・22 田村三治宛書簡）というような、勇ましい信仰の奨励をして手紙を結んでいる。この時期の彼の信仰がこうした手紙の中にかいまみられるのである。

二十八年になると「欺かざるの記」が書かれる。

《四日、土曜日。夜祈禱会に出席す。此の夜は吾も祈禱する所あらんとて出席したり。植村正久氏の感話あり、重に共励会の事なり。此頃教会奮興の氣運少しく起り、殊に植村氏は大に熱する所あるが如し。吾も亦私かに教会に尽すあらんと決心して一月三十日の夜は植村、多田素の両氏を訪ひ、色々と感ずる所を陳述し、意見のある所を尋ねたり。吾が教会に対する唯一の希望は乃ち教会員の懇情を盛にするに在り。》（明26・2・4）

多田素は、日本基督教教会派の牧師であり、植村正久とともに明治のプロテスタントを指導し、人々に、大きな感化を与えた人である。〈懇情〉とは〈fellowship〉のことである。こういうように祈禱会で、教会の〈fellowship〉を深めてゆかなければと植村正久や多田牧師に進言する程、独歩は教会生活に熱心であったということが云える。先に引用した書簡は、日記の中でこうして裏づけされているのである。また、祈禱会に出たが、〈吾は一語をも漏す能はず、一句を祈る能はずして了はれり。吾は大に反省する所ありたり〉と、祈りのできなかったことを反省している点などからも、かなり熱心に教会生活をしていたことが理解されるのである。明治四十一年七月の「新潮・國木田独歩号」に、植村正久は「信仰上の独歩」という一文を寄せて次のように云う。

《國木田君は明治二十三年頃、未だ早稲田専門学校在學時代に学友の田村三次君などと一緒に私の手で洗礼を受けた。教会はその頃一番町教会といふのであつたが、今は無い。その間には格別云ふこともないやうだ。豊後の佐

伯に行つてからも信仰は持つて居て、生徒や友人等にも大分宗教の話しを聞かして居たといふことだ。現にその頃君の手で導かれた信者の一人が今私の教会にも居る。マアその時分は熱心であつたといふてよからう。然しそれから色々と世の中の波に揉まれ、苦い経験を嘗めて信仰も何だか曖昧になつたやうに見えた。》〔「新潮」追悼・特輯号、明41・7〕

独歩の信仰について、佐伯に行つてからは信仰はかなり熱心であつたが、一番町教会時代は別にどうというほどのことはなかつたと言つてゐるが、この文章自体、植村正久が独歩に洗礼を授けてから二十年近くの年月を経たものであり、明治二十三、四年頃と、漠然とした云い方しかしてゐないし、田村三治の治をへ次と間違えたりして、かなり過去の記憶があいまいになつてゐる文章であるから、当時の独歩のことが、正確に綿密に描かれてゐるわけではない。書簡や日記を通してみる独歩は、植村正久の感想より、もっと誠実な信仰に生きていたのではないかと考えられる。

《吾は何時の間にか一の病にかゝり居りし也、則ちエゴイズム之れなり、吾は理想々々と呼びしも其の実エゴイズムの絶頂なりし也、理想則ち吾にあらざして、「我」は其の「我」を装ふに理想の口実を以てしたる也》(明26・2・23) というようなエゴイズムの問題に心を悩まし、自分の中でエゴイズムが激烈な力でうごめいてゐることを強く意識してゐる。そしてへエゴイズムは、猜疑なり、煩悶なり、寂寞なりと定義し、そうしたエゴイズムに打ち勝つものとして愛をあげてゐる。《愛なる哉、愛なる哉、ア、愛なる哉、一語の加ふ可きなし、悠々千古の心、黙、契、弁無かる可し。》(明26・2・25) という立場の愛は、たんなる人間的な愛ではなく、上からの愛、すなわち神の愛を意味してゐるのである。このことは、さらに《吾の心裡に一の声あり曰く、汝の修養はよし。意志を堅くし、悲悶を払ひ、悠々平優々乎、理想の上に立たんと欲するはよし、然れども其の悲哀を払はんと欲するの極、涙なく情なく只だ

社。会的。意。志。の。み。の。人。と。化。し。う。す。る。の。懼。な。き。乎。と。》(明26・2・23)と、みずからに問題をなげかけ、そして答えて言っている。

《答て曰はん、然らず々々々、決して憚る勿れ、夫れ悲哀に二つあり、一は「我」より出で一は「神」より来る、「我」より出づる者、之れ毒泉なり、飲む者は悶死し、「神」より来る者はウオルズウオルスの所謂ゆる「The still sad music of humanity」にして其の音や、清く、高く、遠く、幽静なり、心の清き者に非ざれば聞く能はず、能く之れを聞く者は理想の人たり——則ち愛を誠と労作の人たり、己に然り豈に煩悶あらんや、天命を信じて事業に究る、クリストの如き之れなり、ウオルズウオルスの如き、皆然り、固より涙あり、情あるなり、同胞人間の為めに、神の爲めに心の最低より涌き来るなり、「我」より出づる悲悶は神の罰也。》(明26・2・23)

人間の「我」にねざすところのものは悲悶、つまり、苦しみであり悲しみであるけれども、神より来るものは、清く、高く、遠く、幽静であるというのである。ここにもまた、先程のエゴイズムにねざす孤独と「愛なる哉、愛なる哉」と讚美しないではいられない神の愛との対比をみるのである。こうした神の愛は観念的な形でしかあらわれないが、これまた独歩の信仰的表現であることにはまちがいが無い。ここで、「クリスト」という名前が出てくるが、「欺かざるの記」において独歩の信仰を考へる時、独歩におけるクリストとは何であったか、神学的な云い方をすれば、独歩におけるクリスト論は、どういうかたちで、独歩の信仰生活に位置していたかということが、重大な問題となってくる。「欺かざるの記」の中でクリストの名がどういうように呼ばれているか考察してみる必要がある。「クリストの如き之れなり」と云い、すぐ同じ口調で、「ウオルズウオルスの如き」とつづけている。《人はクリストなる可く、又た孔孟たる可。エマルソンたる可し、彼れ人間なればなり、然れどもクリスト、孔、仏の類たるを得ずと雖も毫も恥ずる所なし。》(明26・3・23)

《サブライムを感ず。エスクリスト、のうちに、エマーソンのうちに、ゲーテのうちに、然り無窮に続く》(明26・3・23)、《友は軽く吾が沈思感憤して得たる思想に向てうなづく、われ豈にエマルソンに向て、ゲーテに向て、カーライルに向て、クライストに向てその如くならざるを知らんや。》(明26・6・24)

独歩がキリストの名を記す時、それは、彼の尊敬する人物と、同時に並列されているのである。へ一個の人、決して軽視すべからず。……キリストは其の罪を視て措く能はず、身を捧げて之を救ふ事に死す」というように、十字架を人類の贖罪のためのものであると信ずる福音主義の考え方も見られなくはないが、同時にへクライストの如き、ソクラテスの如き、ウォルズウォルスの如き、カーライルの如きとのべて、キリストを《其他聖賢真人》の一人と見なしている。そこには、キリストの神性は肯定されていないのである。これは独歩の信仰を考える上に、ゆるがせにできない点である。つまり、独歩においては植村正久の教える三位一体の神との交わりが欠除し、神の第二のペルソナ、すなわち神の御子としてのキリストに対する信仰告白が希薄なのである。信子との愛が破綻をきたしたのちに、この点がさらに重要性をおびてくる。独歩においては、一方で《神の國》とか《神の愛》が云われながら、《神》すなわち三位一体の神の概念は欠落し、神とキリストは、遊離しているのである。植村正久の説いた教えを其のまま受入れていないので、教義上の《ズレ》が如実にあらわれてくるのである。とは云え、独歩はたんにイデアリズムとして、キリスト教に入信したわけではない。受洗し、信者との共同体としての社会生活を深めてゆく過程において、人生において《神の國を求める》ことが信仰者の第一義であるという自覚をもつのである。しかし、彼の中で、キリストが神であり、真の人類の贖罪者として告白される信仰は育っていない。

この事実をもう一つの面から眺める時、独歩の信仰は、かなり理想主義的な性格をもつものと云える。「欺かざるの記」に、しばしば《理想信仰》という言葉が出てくるのは、先にもちょっと触れておいた通りである。《吾が理想

に立つ信仰の猶ほ極めて弱きを見るなり」（4・10）などという表現や、「吾は自然の呪」といい、「理想信仰」と結ぶところなど、独歩の信仰を特色づけている。理想という言葉が信仰の問題の中に出てくるのは決して否定されるべきではない。それにもかかわらず、独歩の信仰に対して疑問を抱かせるのは、キリストが神の御子として信仰告白はされていず、むしろキリストは、独歩の夢みる理想の体験者として憧憬されていることに起因しているのである。独歩にとってキリストは、一番高く憧憬する人物かも知れない。しかし、同時にキリストはワーズワース、ゲーテ、エマーソンと本質的なちがいはないのである。このことについて、「牛肉と馬鈴薯」をとり上げ、くわしく考えてみることにする。

《神の愛》を思う根拠は自己のミゼールにある。理想が高ければ高いほど、現実の自己のみにくさはその悲惨さをさらけ出す。理想主義の傾向を持つ独歩が、理想と現実の絶対のへだたりに苦悩したのは、当然であった。

《腐肉にうじのわくが如く、腐水に子子のわくが如し、吾が腐りたる肉情には毒虫臭蛇むらがりわき、吾が天来神与の霊神魂を喰ひつくして、天地の美も、善も、愛も、火も、高も、和も、深も、幽も、玄も、吾の前には消え去りたる也。死の冷劍、滅の氷池、此の吾が腐肉をきざめよ、大宙大宇の烈火猛焰、此の吾が腐をやき尽せ。》（明26・4・26）

《吾が心乱れ、吾が精神腐り、吾が智亡びぬ。見よく冷嘲するに堪へたる哉。此の俗心俗骨、虚脳偽心は嘲るに堪へたる哉》（明26・4・26）

《忽然として、心頭を掠め去る者は、現世、現時、功名の情なり。忽然として、襲ひ来る者は、理想雄大の大猛気なり。忽然として、湧き来る者は、混々たる厭生思想なり。忽然として、私語する如く感ずる者は、放縦放逸の情なり。》（明26・6・10）

《吾が大猛気も心、思はず實際をかへりみる毎に其の誠氣の香味を失ふ心地す、之れ猶ほ吾が精神進歩の低きなり。》(明26・6・15)

《われ茲に生る、豈に偶然ならむや、碌々として愚と、愆と、悪と、醜との支配との下に空死すべけんや。》(明26・6・15)

原罪のもたらす人間性の悲惨さを激しく実感として味わう時、そして理想と現実とのうめることのできない溝を、己れのうちに経験する時、そうした傷ついた人間性の癒しとしての神の愛へ目を上げることになる。人間性の矛盾を激しく体験すればする程、神の愛の宣言には力がこもるものである。独歩が、ここでいう《神の愛》が、彼のうちに、経験として深められてゆくのは、のちのことであるが、問題はそれがどの程度、独歩の中で徹底してゆくかである。

「欺かざるの記」は、右のような性格をもっていたにしても、信仰的内面の告白が至る所で証明されている、信仰の記録ということは許されるであろう。佐伯時代に近ずいてくるにつれて内面性の告白は真摯なものに深められてくる。二十六年八月九日頃の日記は真剣な信仰の告白であり、祈りの形式をとっている。日記が、祈りでうずめられてくるのである。

この頃は、独歩がストライキに失敗してからの青春彷徨ののち、金森通倫の主宰する自由社に入って現実のがさを味ったすえ、自由社の経営不振から解雇され、加えて、父の免職という状態の中で、収入の道を考えなければならなくなっていた時期である。福島民報に入社していた中桐確太郎にも就職を依頼するが、結局、徳富蘇峰の紹介で矢野龍溪の推薦を受け、大分県佐伯町の鶴谷学館に奉職がきまるまで二、三か月のことである。このように、窮境を切りぬくための生計の資を得る必要にせまられた現実面の緊迫が、かえって精神的緊張を独歩に与えて、その結果

が、「欺かざるの記」の内容に人生に対する真剣さを深め、日記それ自身が祈りのかたちをおびてくるのではないかと考えられる。

《愛、クリスト・エス其他の尊き人々の信仰の心に充ちし愛、人間が神につながる最後の糸なる愛、此の愛の泉、愛の火、ア、神よ、吾をして愛に對して活ける深き、争ふ可からざる、信仰を加へ与（給力）へ。ア、我が心頑固にして神の限りなき愛を感ずる能はざる乎。神を愛する能はざる乎。愛の神よと呼ぶ能はざる乎。ア、我をして一時のパッションにあらずして、堅き信仰、盛なる「シンシリテイ」の中に、愛、義、美、善、凡ての貴き「リアリティ」を呼吸せしめ給へ。》（明26・8・2）

これは早朝にした祈禱である旨の注がついている。このように日記の文章が祈りの形式をとり、日記に向うのが、祈りの姿勢になってくることは注意すべきである。そして、祈りの内容は、佐伯時代に近づくにしたがって、リアリティを深めていくのである。

だが、信仰の上からみる時、ここにも、また一つの問題が生じてくる。祈りという形式を通して、告白がなされるのは、一応、積極的な信仰が見出され、意味深いと云えるとしても、それは、どこまでイエズス・キリストに対する信仰告白になっているのであろうか。独歩の祈禱の中にはキリストの名はない。《キリストの御名によって祈れ》という聖書の言葉を強調した植村正久の教えに従って、《御名によって》取りなしを願う態度はみられないのである。故に、こうして引用してみれば、ひとつひとつ、きわめて情熱的な告白ではあるが、真剣な祈禱というより、むしろそれは、それで、ひとつの詩、ひとつのPoemにすぎない。明治二十年代のロマンチズムが、文壇を風靡している時代に、人間の内面告白が祈りのかたちをとったとしても不思議ではない。《神よ、われを強めたまえ》というような祈禱が全然信仰的に空しいとは云えない。しかし、それが真に祈禱であるか、たんなる一片の詩として終結するか

は、そこに、キリストの名があるかどうかにかゝってくる。独歩の場合は、〈御名によりて〉と、キリストの前に跪いて、とりなしを願う信仰はない。これは前述した通り、キリストの神性は肯定されず、聖三位一体の神が告白されていないという結論と同じことになる。

八月八日の日記は、佐伯時代への接点を示すとも云うべきものである。

《夕陽の美を此室の窓外に望む毎に心躍る、緑葉鬱樹、斜めに光を受けて碧空を負ふて婆娑たり。光、色、空、動、風、生命、変化、嗚呼々々無窮の自然、大なる自然、神の衣、神の器、神の呼吸、神の暗示、神の宮。嗚呼、死するも生くるも、人は茲の愛児なり。驕児たる勿れ。アア死する（も脱力）生くるも、吾茲に在り。オ、永遠の生命、不死、不死、ア、神よ、感謝す。此の愛に答ふるために満腔の熱心と忍耐とを以て働かしめ給へ。》（明26・8・

3）

これもまた祈りになっているが、今までと、はっきりした違いを示すのは信仰と自然との接触してくる事実である。これより以前は、信仰について述べている部分と、自然について云っている部分は結びついていなかった。それが独歩の信仰生活の中で、信仰と自然は不即不離となり、一体となってくるのである。さらに信仰と自然が、生活の中で一体となってゆくのが、佐伯時代においてである。

独歩の信仰は植村正久の福音主義のプロテスタンティズムには、ごくまれたものであった。しかし、独歩は、植村の教義とはずれた次元で、信仰生活をいとなむことになる。そのひとつのあらわれが、佐伯時代における自然への没頭である。植村の流れをくみながら、植村の教義とのずれたところから独歩の文学が誕生する結果になっているのである。

二、植村正久の独歩に与えた文学的影響

ワーズワースが、日本にどのような経路で紹介されたかに、太田三郎氏は「比較文学」（研究社）の中で言及している。それによると、植村正久をキリスト教界におけるワーズワース紹介の代表的人物であるとし、島崎藤村がワーズワースを知ったのは、明治学院の教育によるとみている。徳富蘇峰、巖本善治、石川啄木などがワーズワースに近づいてゆくのも、キリスト教会という一つの文化圏の影響である。この文化圏をつくった一人が植村正久であり、その背後に宣教師、東京大学の外人教師がいたことを指摘している。太田氏の説通り、キリスト教を基盤とする文化圏から、独歩が大きな刺激を受けたのは、たんにワーズワースに因ってだけではない。しかし、ここで注目しておかなくてはならないのは、独歩がワーズワースから、一生の思想を左右するほどの大影響を受けているにもかかわらず、当時、ワーズワース紹介の記事は、ごくわずかにすぎないという事実である。一例として、キリスト教の文化圏を代表した「女学雑誌」と「国民之友」にワーズワースという名前をさぐってみれば、この事実ははっきりする。

ワーズワースに関して、「女学雑誌」でとりあげられている主なものは、巖本善治が、自然詩人としてワーズワースの名をあげているほか、「ライツヨルスの兄弟」（一一二号 明26・6）と、「ウィリアム・ウォルツォルス傳（一）」（一九四号、明26・12）、「同（二）」（一九九号、明23・2）だけである。署名は、「と・ら」とある。それは、ワーズワースの伝記のごく概略であり当時独歩は詩集を読んだ記録はあるものの、まだワーズワースにそれほど興味を示していないから、これらの記事に深い関心をもったとは思われない。「国民之友」をひもといても、わずかに次の小文が見出される程度である。まず、藻監草の欄で「一語千金」と題し、ワーズワースの言葉を五句引用してある。

《一語千金 ウォルツウヨルス 余ハ天ニ虹ノ横ハルヲ見ルヤ吾心躍ル My heart leaps up when I behold a

rainbow in the sky—Wordsworth》(一五六号 明25・9・9)

《智慧ハ仰グ時ヨリキ俯ス時ニ近シ Wisdom is oftimes nearer when we stoop than when we soar—Wordsworth》
(一七四号 明25・12・9)

《沙翁ガ用ヒシ語ヲ用ヒ弥翁ガ持セシ信仰ト道德ヲ持スル我等ハ自由ナルヲ得ズンバ死セン耳 We must be free or die, who speak the tongue that Shakespeare spoke; the faith and morals hold which Milton held》(二三三号 明27・9・13)

《請「出デ遊ビ、一ニ自然ヲ師トセヨ Come forth into the light of things; Let Nature be your Teacher》

(二五六号 明28・7・30)

《神ハ靈魂ノ底深キヲ嘉ニス上ハ辺喧シキヲ嘉シセズ The Gods approve the depth, and not the tumult of the soul》(二六四号 明28・10・5)

湖処子が二十六年に十二文豪傑叢書に「ワーズワルス」を出したほか、ワーズワルスに関して、「国民之友」に見られるのは、ヘウォルツウォルス作・家永えい子訳「稚き折のことを憶ひいでて永却存在をさとする歌」が、百八十六号(明26・4)に掲載されている。三百二十二号(明25・7)に島崎藤村が、「郭公詞」をのせて、ワーズワルスの詩を紹介している。「国民之友」にみられる主なワーズワルスに関する記事はせいぜいこの程度のものである。

この事実は独歩が、ワーズワルスについての記事を多くよみ、それによってワーズワルスへの関心を強めたのではないことを示している。太田氏のキリスト教会という文化圏を通して独歩はワーズワルスを知ったとの指摘は正しいが、独歩とワーズワルスの関係に関するかぎり、文化圏は植村正久ひとりをさす方が的確と云えよう。それは同時に、独歩に対する植村正久の影響のいかに大きかったかをも語るものである。独歩が植村正久から受けた影響は、広

く大きく文学の面にまで及んだ。

《夜植村正久氏を訪ひ語る、職業の事を頼む。信仰を論じ、人間の弱点を論じ、詩人を論ず。カーライルを論じ、ウォズワースを論じ、テニソンを論じ、バイロン、バーンスを論ず。ウォズワースの厳正淳朴の生活を語る、其の信仰と自信の岩の如く山の如き感ずるに堪へたり。ウォズワースが名譽を空となし富貴を空となし只だく信仰の中に猛進せしが如きに至りては吾をして最も感嘆に堪へざらむ。》（明26・8・28）

植村正久は、八月十二日の「日本評論」第五十四号に、「自然界の予言者ウォズワース」を書いてゐる。植村と話しあつたウォズワースのことが、この論を中心としていたことはあきらかである。そして、この植村の評論から大きな影響を受けた独歩は、今までよりさらに深くウォズワースへ傾倒してゆくのである。

「自然界の予言者ウォズワース」は、まず二章からなり、一章を「日本評論」第五十四号に、二章を同五十五号に掲載してゐる。大内三郎氏は、△「自然界の予言者ウォズワース」は植村の西洋文学論中おそらく最も注目すべき労作であろう」と云い、植村が、近代西洋文学の紹介に先鞭をつけた一人であることを強調して次のように述べる。

《日本における英国浪漫詩の鑑賞は、藤村、禿木など「文学界」同人から始まつたと言われているが、その創刊前に植村はバイロンについて論じ、またその創刊と同じ年にこのウォズワース論を彼の「日本評論」において発表したのである》

論旨は、ウォズワースを哲学的思想家と定義することから始まつている。ウォズワースが、詩人としての気高い使命感に忠実であり、詩をもつてへ一世の師となつた人である点をまず強調する。詩人として、人の師になりたいという独歩の願望も、植村正久のウォズワース観に負うところが少くない。植村はウォズワースの幼少時代よりの性格

に言及し、ワーズワースが、革命の最中のフランスに旅し、革命の経過を眼のあたりにして、英国の制度を愛する保守平民主義の人となった過程を説明する。しかし陰翹高踏の士となつたのではない。彼は詩人となることを選びとつた。その理由は、*（詩の事を熟慮せり。その結果として思へらく、余が平生心を寄するところの真理に達する方法は、詩の富瞻円足にして異様窮り無きに如くもの無し。之を言語に顕はし、其の微旨を推薦して Dwellers in the hearts of men（人の心に住むもの）たら志めんには、詩の力に優れるもの有る可らずとある。そして、*（詩人として、*（百難にも撓まず、千挫にも屈せず、面も振らず、一心不乱に此志を成さん）とした。貧に甘んじ己れを修め、詩思を錬磨すること以外に心を散らすことなく、富を希わず、名声をも求めず、山間湖辺に悠々歲月をすごしたのであった。節儉、素朴なる生涯を送ることを信条とし、高尚なる思想を修めることをモットーとした。このようにワーズワースを紹介しながら、植村は、他の詩人と比較してワーズワースが、いかに誠実な生き方をしたかを力説する。そしてワーズワースの言葉を引用する。***

《大いなる詩人は教師に非るもの無し。余は教師として算へられずんば、他の資格に於て世に立つことを願はざるなり》

植村は、ワーズワースが毀誉のために動かされず、世の議論に頓着することなく、寂しさと、素朴な生活に甘んじたのは、こうした詩人としての使命に対する確信をもっていたからであるとす。

独歩は、こうした植村正久のワーズワース論に強く影響されているのである。その影響は、ワーズワースの作品自体が独歩にあたえたものより、はるかに大きい。つまり独歩は、ある意味でワーズワースに向ける植村正久の目を通してワーズワースを心に受け入れるのである。

二十六年九月九日に、前章につづく「自然界の予言者ウォルズウォルス」論が「日本評論」に発表される。ワーズ

ワースは写実の精神と理想の幽高とを兼ねて、自然界を観察し、目と靈魂とをもって天地の美を眺めた。ゆえに、その詩は最も善く自然界の意義を發揮し、その間に含蓄された真理を（闡明し、天下の人をして意外の点に大道の存するを知らしめたのである）。ワーズワースは自然の秩序と美とから、学びとることが深かった。

《吾人はウォルズウォースとくまに山の美を感じ、水の音楽に耳を傾くるを得べし。然れどもウォルズウォースの自然と情感を交通せんとするや、其の結果は堂々たる偉男児の如し》

と、植村正久は云う。独歩もまた（自然と情感を交通せん）という言葉を用いて、好んでくりかえす。ワーズワースがいかに平民主義の人であったかの説明として、植村は天然の景色において、微なるものを軽んずることをにくみ、詩材として、普通は顧みられないようなものに暖かい目をそそいだ。さらに人を題目とするときに、無名の人々の人格の尊厳を歌い平民主義的態度は顕著であった。〈帝王将相匹夫小人の区別は其の間ふ所に非ず。歴史の上に豪傑として顕著なる偉人も、陋巷に生れて陋巷に死するものもウォルズウォースの目にはたゞ人類として見られ志のみ。凡そ人情の切なるもの志気の高尚なるもの境遇の憫むべきものあれば、匹夫も帝王と同じく詩の題目として可なり〉と云い、また（彼は痴漢の母も）、詩題として適當であるとした旨をのべる。

独歩は、この評論の發表された翌日、植村正久を訪ね、ヘウォーズウォースを語り、其他詩人哲学者の事を語り、語っている。その頃、中桐確太郎に宛てた書簡の中で次のように云っている。

《小生此頃植村正久氏と余程親密になり時時談話に参りウォーズウォース、テニソン其他詩人哲学者、宗教、文学の談き益する処少からず。》（明26・9・13）

独歩は植村正久を通してワーズワースの真髓に迫ったのである。ワーズワースの特色として植村が列挙する点を、独歩はよくこなし、のちに、そうした知識を自分のものとして、作品に実らせてゆくのである。

独歩と西洋文学者の關係をのべる人は、必ずと云つてよい程、西行へひかれた独歩をも考へる。私は、独歩を直接、西行へ導いたのは植村正久であつたと考へる。植村は「福音新報」第百六十四号（明27・5・4）に、「ワーズ集」を讀む」といふ一文を寄せている。彼はまず、西行の「山家集」に共鳴して、

〈彼がその高大なる理想を深くその胸深くその胸底に蔵め、孤筇飄然去つて諸国諸州を廻りながら、天然に寄托してその詩腸をしほり、独り厭世の悲歌を歌うて、その懷を遣りたるあとを見て、その作者に同情を寄するや久し。彼は常に天然に対して己れを吐き出せり、その咏じ出せる者にして一として彼が理想の衣をこれに着せざるはなし。月雪花のその歌は皆その内に一個の西行を宿さざるはなし〉

と云う。そして「山家集」の作者は、

〈失恋の人なり、人生の破船者なり、彼の足はこの世界を歩めども、彼が衷なる人は遠くこの世界を離れ去りて他界に遊べるなり。ゆゑに天地万有は皆彼においては他界のものとなりおわる〉

と結論する。西行の本質を、自然との断絶された人間の心の底からにじみ出るような悲哀におく。へまことに「山家集」の作者の垂流なるかな」との感想をもらしながら「山家集」の一節を記す。

《春は藤波を見る。紫雲のごとくにして、西の方に匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路を契る。

秋はひぐらしの声耳に充てり。うつせみの世をかなしむかと聞こゆ。冬は雪を憐れむ。つもりきゆるさま、罪障に譬えつべかし》

そして西行と、ワーズを比較する。ワーズの「大空を眺めて紅霓見れば」（雲雀の歌）の詩を訳しながら深い共感と讃嘆を示している。この雲雀の詩をうたうワーズもまた西行と同じく、〈詩囊を荷いながら、天然の語る声を聞いて〉詩情を抱いた人である。それにもかかわらず、「山家集」の作者とこのワーズとの間

に、いかに動かしがたい懸隔の横たわるかを例をあげながら、あきらかにしてゆく。

《大磯の湾頭秋まさに暮れんとす、蒼然たる暮色転た人をして凍寥ならしむ。適々一鳥の飛鳴して過ぐるあり。心なき身にも哀れはしられけり

鳴立つ沢の秋の夕暮

と咏じつつ、笛によりて悄然たる一個の行脚僧を想ひ見よ。「秋はこの法師姿の夕べかなし。人をして凄然袖をしぼらしむ。」

去つてワーズワースの兄妹が、早曉四時深く朝霧の裏にこめられて、未だ眠りよりさめ来たらざるロンドンの朝気色を眺めながら・ウエストミンスター橋上に立ちて、

Dear God! The very houses seem asleep,

And all that mighty heart is lying still!

と詠せるの画図を画き見よ。いかに希望あり光明あり、怡悦にて充つるかよ。

ワーズワースの集は『山家集』を抜くこと実に幾等なるやを知らず。ただにかの蒼然たる暮色の、希望と光明と怡悦とにて充つる朝気色に如かざるがごときのみならず。》

ワーズワースは決して恵まれた一生を過したとは云えないが、幸福だったことには、コウリヂとドロシーの二人のみちあふれる愛情につつまれていたことである。この二人がワーズワースに与えた感化は、はかりしれない。彼はこの二人を媒介として天然を見たのである。そして、この二人のような存在を西行と結びつけて仮定しながら、ワーズワースと西行の絶対的な差異を短かく鋭くつづのである。

『山家集』の作者は失恋の人なり、人生の破船者なり、失恋の人は、或ひは失望の人なり、もしそれ彼に与ふ

るにコウルリヂのごとき親友をもつてし、ドロシーのごとき優美の化身をもつてせば、彼が天然に對する詩情はいかに變化したることならん。恐らくは全く一変したるやも未だ知るべからず。さらでもなお足らざる者あるにや。》
 〈独歩のワーズワース論は、植村正久の著名なワーズワース研究論文「自然界の予言者ウォルズウォース」に影響されたところもある〉と指摘しているのは塩田良平氏である。寺園司氏も「日本評論」が二十六年に発行された当初から、独歩は、「日本評論」を愛読した事を指摘している。寺園氏に、次の明晰な意見がある。植村正久の哲学的なワーズワース観の影響を強く受けた独歩は、この植村の論文の鮮明なうちに讀んだ宮崎湖処子の「ウルツヨルス」に批判的なまなざしを向けることになる。その結果が、後年「信仰生命」の中に「余此のごろ湖処子の著、ウォーズウォースの伝を読み、深く真詩人と空詩人との由りて分かるる処を感じぬ。ウォーズウォースは真詩人なり。湖処子は空詩人なり。余は此の如き空人物によりて、此の真詩人が吾國に紹介せられたるを残念に思ふ。》湖処子には自家の田園的趣味を以て此の自然の詩人を料理せんとはする也」というように、湖処子批判となつて述べられるという考えである。

私も寺園氏の考え方は正しいと思う。もっとも、宮崎湖処子もワーズワース伝を著作するにあたり、植村からF・W・Hマイアースのワーズワース評伝についてしばしば教えを受けている。この独歩の鋭い湖処子批判は、湖処子と独歩の差異を示すものとして興味深い。

ただ、ここで植村正久から教えられたのは、ワーズワースだけではない。先に引用した「欺かざるの記」の記録のように、一夜のうちにも、カーライル、テニソン、バイロン、バーンズなどについて植村と論じているのである。

植村正久に「国民之友」と女学雑誌を比較した一文がある。

《国民の友の特質を挙ぐれば面白き雑誌なりと謂ふべきか、之を物に喩れば寄席の如きものなり。其長所は娯楽

的にあり。

女学雑誌は、其の題号より見れば婉麗なる婦女の友なりと思ふべけれど其の実は然らず。其の性質は精神的の教養を主とし、志を高尚になすの伴侶たるにあり。之を物に喩れば儒者の私塾の如し。余輩窮窟なる講釈と嚴なる勸告とを喜ぶ。》（「日本評論」第五号 明23・5・10）

この論の発表になる頃までに、独歩は「アンビション（野望論）」「感ずる処を記して明治二十二年を送る」「水車と姦淫公許」の三文を「女学雑誌」に寄稿している。また「国民之友」には一度も筆を取っていない。若い独歩が植村の説に喜びを禁じえなかつたのは、無理からぬことであつた。植村の日本文学論は、文学理念のみならず、「日本のキリスト教文学」「キリスト教文学と仏教文学」に広い見解を示し、日本語の研究にまで及んでいる。植村の「西洋文学論」も広範囲で、ブラウニング・ストウ夫人、ウォルター・ペザント、エドワート・ベラミー、ヴィクトル・ユゴー、トルストイ、トマス・カーライル、ゲーテ、ロード・バイロン、アーノルド、ロバート・バーンズ、シュトラウス・ルナン、テニソン、ワーズワース、ダンテ、グレイ、リチャード・ホウルト、ハットンなどの文学者が列挙されている。なお、「福音新報」誌上では、テニソン、ダンテ、イプセン、サミュエル・ジョンソンについての所感、紹介文を発表している。

塩田良平氏の調べによる独歩の読書一覧表及び、それに先行する時代の読書についてみると、独歩の記す文学者名が、この植村の言及する文学者名とほとんど一致していることは驚く程である。これは植村正久が、外国文学紹介にあずかっていかに力があつたかを物語ると同時に、植村の文学論の発表される「日本評論」その他の雑誌を独歩が愛読していたことと考えあわせて、独歩が植村の刺激を受けて文学の道を進んでいたことをも明示している。

また、「聖書」、「讚美歌」、「自作の詩および訳詩」などについても、植村の文学的素養の幅の広さが伺える。斎藤

深「明治基督教文学雑藪」によると、植村正久の周囲に集まった当時の文学者として、青果、紅緑、喬松、空穂、残花、雪舟、藤村、孤蝶、白鳥、魯庵などの名前がある。

このように文学に対する造詣の深いプロテストメントの牧師が、そのもとに集まる青年たちに大きな影響を及ぼしたことは自明の理である。とくに〈詩人たること〉に最高の価値と使命を見出していた独歩が、植村正久から受けた影響は、なみなみならぬものであった。植村正久が海外の文学を批評紹介したにとどまらず、訳詩にはすぐれた業績をみせ、彼自身、詩をつくり讚美歌を作詞し、奥野昌綱や松山高吉とともに明治二十三年出版の「新撰讚美歌」の編集にあたっていることは注目に価する。独歩は、讚美歌から、独い印象と刺激を受けていた。また植村から讚美歌についての話をよく聞いていた。こうした点からみても、独歩詩と讚美歌の関係をのちに独歩の抒情詩をみるとき考えてみたい。

註

- 1 坂本浩「園木田独歩」(三省堂)。
- 2 羽仁もと子「羽仁もと子著作集」(婦人之友社)。
- 3 植村正久「人の子と神の子」(「福音新報第十三号」 明治二十四年六月)。
- 4 大内三郎「近代日本思想史上の植村正久」(「福音と世界」 昭和四十年十月)。
- 5 坂本浩「園木田独歩」(三省堂)。
- 6 塩田良平「園木田独歩全集第六卷」解説(鎌倉文庫 昭和二十三年十月五日)。
- 7 寺園 司「植村正久と園木田独歩」(国語と国文学 昭和二十八年七月一日)。